佛教讀本

卷四

特258
120

始

相 238
120

佛教讀本

卷四

大谷學院編纂

昭和廿年
帝國圖書館

凡例

一、この讀本は、昭和十一年九月の大谷學院教科書改訂委員會の改訂要項に準據して補訂を加へ、大谷學院、第四學年に於いて課する佛教讀本として編纂したものである。

一、佛教讀本卷三には、教祖釋尊の御傳記を主とし、それに印度佛教史の綱要を加へ、卷四には佛教教理概說、卷五には主として支那佛教諸宗概說を載せ、此等三卷によつて、佛教一般に通ぜしめるやうに、各卷聯關を考慮しつゝ叙述した。

一、本卷は、從來の佛教教理概說が論理的叙述にのみ趨つて無味乾燥となる弊を避け、成るべく人生の實際につき、自分の宗教として味はれるやうに

留意した。

佛教讀本　卷四

目次

第一章　人生……一
第二章　人間苦……四
第三章　人間苦の因……一三
第四章　業と報……一八
第五章　十二緣起……二三
第六章　三界唯一心……三四
第七章　因緣生……四二

第八章　實相……四九
第九章　三法印……五三
第十章　道（上）……五九
第十一章　道（下）……六九
第十二章　菩薩の精神……七六
第十三章　さとり……八九
第十四章　佛陀……九六

佛教讀本　卷四

第一章　人生

人間は何が故にこの世の中へ生れて來たのか解らないが、然し既に生れて來て、現にこの世の中に生きてゐるのである。この何が故に生れて來たかが解らないのと、この人生には思ひのまゝにならない種々のことがあるがために、我々は絶えず苦しみ惱まねばならないのである。

若しこの人生の意義が明らかとなり、また何事もみな我々の思ひのまゝになつて、何等の苦しみ惱みもないならば、恐らくこの人生に、如何なる宗教も現はれなかつたことであらう。人生に宗教

が現はれたといふことは、この人生の意義、目的が解らないのと、この世の中のことが、我々の思ひのまゝにならず、從つて種々の苦しみ惱みの絶えまがないからである。

宗教の第一歩

されば宗教の第一歩は、平易な語でいへば、人生の不如意、思ひのまゝにならぬといふ自覺に始まり、この自覺に依つて人生に對する正しい見方を得、如意・不如意、吉凶・禍福を超えて、正しく人生に生きることを得、以つて、世の中のため人類のために、大いに盡すといふことに終るものといふことが出來る。

釋尊の求道

釋尊が出家して道を求められたのも、この思ふに任せぬ人生の如實の相を、自覺せられたからである。既に釋尊の傳記に明らかであるやうに、御母摩耶夫人は、釋尊の御誕生後七日目におかくれなされた。たとひ、優しい叔母君の温い養育の下に生長なされた

とはいへ、人生の第一歩に實の母君を失はれたといふことは、どれほど幼けない太子の心を悲しませたか解らない。人生に避けることの出來ない死の暗い影は、既に幼い太子の心の上に覆ひかぶさつたのである。七歳の御歳、春の耕耘祭に、農夫の耕す鋤の尖に掘り返された一匹の小虫を、小鳥が啄み去るのを見て、人生の恐ろしい姿に驚かれて、閻浮樹の下に靜思せられたといふのも、亦この人生の如實の相に自覺の一歩を踏み出されたことを物語るものである。年を經るにつれて、愈人生の如實の相がはつきりと眼に映つて來て、堪へ切れない人間苦の重荷を負うて喘ぎ苦しむ人間の有樣を見かね、遂にあらゆるものを棄てゝ、人生問題の解決を得ようと出家せられたのである。

このことは釋尊ならずとも、多少眞面目に人生を考へるものな

人生の生老病死

らば、誰しも感じなければならないことである。「朝には紅顏有りて、世路に誇れども、暮には白骨と爲つて郊原に朽ちぬ」と。如何なる人でも死は免れ難いものであり、またそれが何時とも知れぬとすれば、日夜うか〳〵とした生活は出來ない譯である。忽々として不急の事を爭ひ、齷齪として不要の事にかゝづらひ、人生五十年、迎へ來り送り去つて、死の手に攫まれて行くやうでは、醉生夢死といはうか、禽獸に等しい生活といはうか、まことに意味のない一生といはねばならない。

第二章　人間苦

されば、我々は先づ人生の如實の相、即ち有りのまゝの姿に眼を醒まさねばならぬ。家を建てるには、先づ土台を造らねばならな

四聖諦

いやうに、悟りの家も、人生の如實の相に對する自覺といふ土台がなくては建たない。釋尊の悟りの家も、人生は生老病死の四つの苦しみに滿ちてゐるといふ自覺の基礎の上に建てられたのである。

然らばその人生の如實の相は如何なるものであるかといふに、佛教ではこれを苦諦といふのである。苦諦といふのは苦諦・集諦・滅諦・道諦の四聖諦の第一であつて、苦とは、人生が苦惱に充ちてゐること、諦は眞實といふことで、それに間違ひないこと、人生が苦惱に充ちてゐることが、眞實であるといふ意味である。

釋尊は實にこの人生の苦惱を自覺して出家せられたもので、我々も人生々活の上に眞面目でさへあれば、この苦惱を經驗せずにはをられず、この經驗を出發點として宗教に入り、新しくして且つ

眞實の人生々活を營むことが出來るのであるが、茲に次の二つのことを注意しておかねばならない。

第一には、右の如く人生は苦惱に充ちてゐるといふけれども、事實必ずしもすべての人がそんなに苦しみを感じてゐる譯ではない。また人生にはそれ相當の樂しさ、愉快さもあるではないかといふことである。なる程、すべてのものが苦しいというてゐる譯ではなくて、それ相當な樂しみもあるとして見ると、人生が苦であると云ひ切るのは、少しく獨斷に過ぎるやうではあるが、然し佛教では、人生が苦であるといふのは、何もすべての人が苦であると感ずるから苦であるといふのではなく、苦と感ぜずとも、畢竟人生は苦であるといふのである。それで佛教ではこの苦を苦々・壞苦・行苦の三種に分つのである。

三苦

苦々

苦々とは我々が苦しいと感ずることをいふのであつて、飢・渴・病苦・勞役等に依り、心身に苦しみ惱みを感ずる場合の苦をいふのである。

壞苦

壞苦とは壞れ崩れること、破壞によつて起る苦しみのことであつて、樂しい愉快だと思うてゐたことが永續せずに壞れて無くなる時に感ずる苦しみである。人間はよく名利に囚れ、財欲の奴隸となるが、なる程望む名譽が得られ、財產が得られゝば愉快であるが、その愉しさが永く續かず、いつしか名譽や財產が重荷となり、それにまた得た名譽を失ひ、蓄積した財產を無くする時も來て、樂しさ愉快さは間もなく苦しさ惱ましさと變るのである。この樂しさの壞れる時の苦しみを壞苦といふのである。

行苦

行苦とは行は遷流、即ち遷り變るといふ意味で、「いろはにほへ

生・住・異・滅の四相

諸行無常

ど、ちりぬるを、わがよたれぞつねならむ」何ものも遷り變らぬものはなく、すべて生・住・異・滅の四相に遷されぬものはない。生は生れる、住は暫くその形を持つ、異は變る、滅は無くなる。約言すれば、生じては滅し、滅しては生じ、何ものも變りづめに變つて行くことである。これを諸行無常といふ。人生のすべてが變りづめに變るものとすれば、この變るといふことで、人生が樂しいものである筈がない。即ち無常なるが故に人生は苦である。我々の感ずると感じないとに拘らず、人生は苦である。これが所謂人間苦である。この無常なるが故に苦であるといふ人間苦を、行苦といふのであつて、この三種の苦は我々人間のあらゆる苦の經驗を總括したものであつて、人間が如何なるものであるか、人生が如何なる相をしてゐるかを示したものである。

佛教と厭世教との相違

第二には、かやうに人生は苦惱に充ちてゐることをいふと、佛教はそれ故に厭世教であるといふ俗難が起るのである。厭世とは自分の當面した現實に堪へ切れないで、悲觀し悄悴して世を厭ふこと、即ち人生を逃避することである。佛教は人生のありのまゝの姿を見て、人生は苦惱であるといふのので、それに失望せず、悲觀することなく、更に進んで悟りといふ新しい生活を作り出すのであるから、人生々活の逃避といふことゝは全く異なるのである。病氣の場合でも、病氣に眼を閉ぢるのは臆病であつて、病氣を癒す道ではない。病氣に負けて悲觀し、氣病みするのも、病氣に勝つ所以ではない。症狀を眞面に見て、適當の療養を加へることによつて壯健になるのである。佛教でいふ人生の相を如實に知るといふのはこの意味であるのである。

四苦八苦

三憍

それで佛教ではこの人生を一言に苦なりといふのであるが、この苦を更に細分すると四苦八苦となるのである。四苦八苦の語は今や一般化せられて、二進も三進も動きのとれなくなつた場合に四苦八苦するといふが、これは正しく佛教から出たものであつて、四苦とは生苦・老苦・病苦・死苦であり、八苦とはこの四苦に更に愛別離苦・怨憎會苦・求不得苦・五陰盛苦の四苦を加へていふのである。

生・老・病・死の四苦は今こゝに説明するにも及ばないであらう。生れる時の苦しみは我々に記憶は無くとも、この世に生れたことが苦であることは、何人も否定することは出來ないであらう。いくら若々しさを憍つてみても、青春は過ぎ易く、老はいつとはなしに迫り、病はいつかはと隙をねらひ、死は常に影の形に添ふが如くについて離れない。生・老・病・死の四苦を離れない人間が青春と健康と生存の三つの憍を持つことは、釋尊の敎のやうに迂愚といはねばならぬ。

愛別離苦

愛別離苦とは愛するものとの別離の苦である。親子・兄弟・夫婦・親戚・朋友、互に遠く別れて住まねばならぬこともあり、幽冥處を異にして、再び相見ることの出來ない場合もある。生別と死別、人の世はこの別離といふことからして、涙の乾く暇もない。

怨憎會苦

怨憎會苦とは憎しみ、怨みに思ふものと一處にあらねばならぬ苦である。一つの家庭に於いて、親は子と爭ひ、兄弟互に相憎み、夫婦互に相妬み合ふことも、世の中には珍らしいことではない。而も一つの家庭である以上はともに住まねばならぬ。又敵同志隣人附合をせねばならぬ場合もあり、仇敵のやうな心で俱に仕事をなさねばならぬ時もある。世の中に人と人との關係程複雜であ

求不得苦

つて、苦しい惱ましいものはないのである。

求不得苦とは自分の欲しいものを求めて得ざる苦である。名利を求め、財を求め、地位を求め、他人の愛を求める。この求めるものが得られないといふことも、堪へられない苦しみである。然も得れば失ふことを恐れる。得て滿足があるのではなく、得て而もなほ重荷となる苦しみがあるのである。

五陰盛苦

五陰盛苦とは、以上我々に種々の苦しみがあるといふことは、畢竟この身體があるためであるから、この身體のあることが、それが苦であるといふことである。

かく考へてくると、人生が苦であるといふことは否まれない事實である。「三界安きことなし、猶し火宅の如し、衆苦充ち滿ちて甚だ怖るべし」と、經典に說かれてゐることは、動かすことの出來ない眞理といはねばならぬ。

第三章　人間苦の因

離苦の法

人間は誰しも樂しみを嫌うて苦しみを希ふものはないが、然らばどうしてこの苦しみを離れるかといふに、その最も簡單な方法は、見ず、聞かず、考へないことにある。然し眼あり耳あり心ある者に、眼を閉ぢ、耳を塞ぎ、心に蓋をせよといふ注文は非常な無理といはねばならぬ。又痛みを忘れるに藥物注射をするやうに、これを誤魔化して一時苦患を忘れるといふことも善い方法ではない。

苦の原因

すると正しい方法は唯一つ、その苦しみの原因を明らかにして、その原因を除き、結果をなくするより外にはない筈である。

一體、我々の苦しみの原因は何であらうか。人は兎角この原因

を他人に歸し、環境の然らしめたものとするのであるが、それは至らない考であつて、よく源に遡つて調べて見ると、みな自分の心に原因があるのである。善因善果、惡因惡果、因果の理法は儼然として動かすことの出來ないものであつて、我々が苦しみ惱まねばならないのも、決して他人のためでも、環境の罪でもなく、自分の業の結果として、當然に受けるべきものを受けるのである。

この苦惱の原因が他人にあらず、環境にあらず、自分にあること、自分の業にあること、もつと遡れば自分の心の煩惱にあることを顯はすのが集諦である。

集諦

集諦は四聖諦の第二であり、集は因といふことで、苦惱の因が自分の煩惱にある、それが眞實であるといふのが集諦といふ意味である。

人間は欲そのもの

一體、人間といふものはいろ〳〵の欲を起すものであるが、よく

人間を觀察すると、人間は欲そのものともいふべく、欲の外に人間はないといはねばならない程のものである。先づ、いつ〳〵までも生きたいといふ欲がある。これはあらゆる生物に共通な本來の欲望であつて、これを佛教では有愛といふのである。

有愛

有とは生存といふことで、生存の欲求・欲望を有愛といふのである。愛は渴愛ともいひ、喉の渴いた者が水を飲まずには居れないやうな激しい欲を顯はす語である。

非有愛

この生存の欲望が根本であつて、これが思ひのまゝにならないと、世を咀ひ人を咀ひ、厭世自殺を望むやうになるこれを非有愛といふのである。

欲愛

非有は非存在であつて、生存の否定を求める欲である。又この生存欲が外に向つて出ると、飢ゑては食を求め、渴しては水を求め、眼に見、耳に聞き、鼻に嗅ぎ、舌に味ひ、身に觸れて心地のよい、氣に適うたものを求めるなど、種々

の姿を取る。この欲を欲愛といひ、我々が普通欲というてゐるものがこれであつて、それもいつ〳〵までも生きたいといふ根本の欲から生れたものである。

先にもいふやうに、人間は欲の外には何も無く、この人間の欲望からあらゆる文化が開展したのであるから、一概に欲を非難すべきではないが、然し悲しいことには、我々の境涯では智慧が浅いがために、欲が正しい方向を取つてをらない。即ち無明に覆はれて盲目的に動き出すから、間違のもととなるのである。明とは智慧のことであり、ものの道理に昏いのが無明である。正しい智慧があれば不正の欲を起さないが、正しい智慧のないために過つた欲を起して風波を起す。これを無明に覆はれるといふのである。

無明

世の中のものは何一つ常住でなく、すべて遷り變るのに、智慧がな

四顚倒

いから常住であると思ひ、無常であるからすべて苦しみであるのに、眼前に囚はれて瞬間の樂しみに執着する。あらゆるものに「我」、即ち「俺が」といふべきものはないのに、俺があると思ひ込み、すべてみな不淨であるのに清淨であると思ひ誤つてゐる。これを常・樂・我・淨の四顚倒といひ、この四顚倒はみな無明に覆はれてゐるところから起る間違ひである。

三毒・三不善根

かくの如く我々の欲は無明に覆はれて現はれ、心に適うた境界に向つては貪欲となり、心に適はないものに向つては瞋恚となる。そして無明に覆はれてゐるが故に愚痴となる。この貪欲・瞋恚・愚痴は三毒、又は三不善根と呼ばれて、我々の一切の煩惱の根本となるものである。嫉み、妬み、憎み、偏みその他あらゆる惡德煩惱は、みなこの三毒から流れ出るものである。この欲を根本とし、貪・瞋・癡

の三毒となり、あらゆる煩惱となる我々の心が、我々の苦惱の根源であるといふのが集諦の意味である。然らば如何にして我々の心が苦惱の原因となるか、如何なる徑路によつて我々の欲が苦惱となつて顯はれるのであらうか。次に少しくこれを説明することゝする。

五欲

第四章　業と報

前にも述べたやうに、我々には生きようとする欲が根本にあつて、これが外に向つて現はれる。外には五欲の境界がある。即ち眼に見る所の心に適ふ美しい姿・形・色（色）、耳に聞く所の心に適ふ美しい聲・音（聲）、鼻に嗅ぐ所の心に適ふ香ばしい匂（香）、舌に味ふ所の心に適ふ美味（味）、皮膚に觸れる所の心に適ふ滑かな感觸（觸）

三業

十善・十惡

である。この五つの境界に對して、欲しい、惜しい、取りたいなどといふ心となつて動き、又心に適はない厭な境界に對しては、腹立たしい、惡い、嫌ひ、怒りなどといふ心となつて動いて行く。かやうな心が起ると、茲に何らかの決意が湧き、その決意が外に現はれると、それが行爲となるのであるが、佛教ではこの行爲を業といふのである。世間では行爲といへば、たゞ身體で行ふことのみであるが、佛教ではこれを身業・口業・意業の三つに分けるのである。殴らうと思ふのは意業であつて、殴るぞといふのは口業であり、殴るのが身業である。この身・口・意の三業といふのは所作をなす場所について分類して名づけたものであるが、更にその性質から、殺生・偷盗・邪淫・妄語・綺語・惡口・兩舌・貪欲・瞋恚・邪見の十惡、及びこの反對の不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不綺語・不惡口・不兩舌・不貪欲・不瞋恚・不邪見

の十善とに分けられる。殺生とはものの生命を取ること、偷盗とは與へられないものを取ること、邪淫とは邪しまな淫行であつて、以上三つは身につき、妄語とは虚僞をいふこと、綺語とは不要の閑話に耽ること、惡口とは荒々しい暴言を吐くこと、兩舌とは團體の和合を破るために二枚舌を使ふことで、以上の四つは口につき、貪欲は貪ること、瞋恚は怒ること、邪見は邪まな見解・主義・思想のことで、以上の三つは心につくのである。十善といふはこの十惡を離れた正しい行爲のことであつて、前生にこの十善を修めたものは、王家に生れるといひ傳へられ、王者・帝王を十善の君といひ慣はしてゐる。又人間の行爲の中、最惡のもの五つを擧げてこれを五逆といひ、五逆罪の者は佛の慈悲にも洩れると誡しめられてゐる。五逆とは殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出佛身血である。

五逆

因果の理法

茲に甲乙の二人があるとする。甲は心優しく情深く、口に柔和な語を語り、身に人の爲になる行爲をなし、乙は心荒々しく、怒りそねみ、口に粗暴な語を出し、身にものゝ生命を奪ひ、他人の物を盗むなどの惡い行爲をなすとする。こゝに因果の理法は儼然として現はれ、甲が人々に稱め讃へられ、心の安かな幸福を得、乙は人々に謗られ、爪はぢきされ、捕へられて獄に投ぜられるに至ることは、火を見るよりも明らかである。これが善因には善果あり、惡因には惡果ありと云ふ所以で、何人も動かすことの出來ない天地の公理である。勿論、我々人間のみならず、あらゆる生物は、たゞ現在生きてゐるといふのみでなく、前生・前々生・前々前生の長い過去を持つてゐるから、過去の行爲の結果として、それ〴〵違つた境遇をもち、この現在の世の業が惡くても、相應に幸福な人があり、又現在善い

三時業

ことをしつゞけてゐても、不幸に沈む人もあるが、然し爲した業は決して消え失せず、何時かは必ずその結果を招くものである。この結果を招く時の遲速について、業を順現業・順生業・順後業の三種に分つ。順現業とは現在の世に作つた業が、現在の世に報いとして現はれるもの、順生業とは現在の世に作つた業が、次の世に報いとして現はれるもの、順後業とは現在の世に作つた業が、次生のその次の生以下に現はれるものをいふのである。業の性質に依つてかやうに報いの顯はれる時に、遲い速いはあるが、何時かはその結果として現はれる。蒔いた種子はいつか自分が刈らねばならぬ。我々は現に今これまでに蒔いた種子の果實を取つてゐるのである。性質の善い惡いから賢愚、生れの善い惡い、境遇の良不良すべてみな自分の業の報いである。かくして我々は現在種々の

惑業苦

十二緣起

苦しみ惱みを受けてゐるのである。苦しみ惱みを受けつゝ、また煩惱を起し、煩惱に依つて業を起し、その業に依つて未來に苦を招く種蒔きをしてゐるのである。惑（煩惱）と業と苦と、この三つは互に結んで輪をなし、車の輪の端なきがやうに、永遠に廻り廻つて竭む時がないのである。これを衆生の輪廻といふのである。

第五章　十二緣起

前章に於いて惑・業・苦の關係を以つて、我々が現に苦しみ惱みつゝある理由を示し、又我々の輪廻のさまをも明したのであるが、更にこれを十二緣起の教理に就いて說明したいと思ふ。釋尊の菩

提樹下の靜觀の內容がこの十二緣起であり、從つてこの緣起說は佛教々理の根幹をなす重要なものであるからである。

十二緣起といふは、無明に緣つて行あり、行に緣つて識あり、識に緣つて名色あり、名色に緣つて六處あり、六處に緣つて觸あり、觸に緣つて受あり、受に緣つて愛あり、愛に緣つて取あり、取に緣つて有あり、有に緣つて生あり、生に緣つて老死ありといふので、即ち無明から老死に至る十二のものゝ因果關係を示したものである。緣起といふのは緣つて生じ起るといふ意味で、この十二のものが互に相依り相緣つて成立し、我々の生活を形成してゐることを顯はすものである。

生に緣つて老死

既に釋尊の出家求道の動機が、この人生の苦を代表する老死といふことであつたことを述べたが、まことに我々の上には病魔が襲ひかゝり、老が忍び寄り、死魔がいつでも摑みかゝらうとしてゐるが、人間はこの老病死の三者に脅かされ、その上に種々の不幸災厄に見舞はれて、愁ひ、悲しみ、苦しみ、惱み、悶えの絕えることがない。如何にすればこの老死を離れることが出來るであらうか。もし老死を離れようとすれば、老死の源を突きとめねばならぬ。それで釋尊は先づ老死は何に緣つてあるか、何が無くなれば老死が無くなるかと考へて、生に緣つて老死ありと決定せられたのである。生れるといふことがあるから老死があるのである、生れさへしなければ、老死は無い筈であるから、生に緣つて老死ありといふことは正しいことでなければならぬ。

有に緣つて生

次に生は何に緣つてあるか、有に緣つてある。茲に有といふのは存在といふことであつて、我々が輪廻の旅路に或は畜生と生れ、

六道
三界

或は人間と生れるのも、その畜生とか人間とかの存在があるからである。佛教ではこの存在を地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道に分ち、又欲界・色界・無色界の三界に分つのである。欲界はこの人界のことで、色界・無色界は天上界のことである。

取に縁つて有

次に六道又は三界の有は何に縁るかといふに、我々の取即ち取着に縁つてあるのである。取着といふのは執着し固執することで、外境に對して我々の心の強い働きかけをいふのである。この心の強い働きかけに依つて有即ち存在が、自分の存在、自分に對して意味を持つ存在となることを、取に縁つて有ありといふのである。

愛に縁つて取

次に取は何に縁つてあるか、愛に縁つてある。執着し固執するのは我々の心に貪愛があるからである。金錢を貪るから金錢に

受に縁つて愛

執着する。これが愛に縁つて取ありといはれるのである。

次にこの貪愛は受に縁つて生ずる。受とは苦・樂・不苦不樂（捨ともいふ）の感情のことで、眼に見て樂しい、耳に聞いて樂しいといふ感情が起ると、その樂しさを起したものに貪愛を生ずるのである。

觸に縁つて受

次にその感情は觸に縁つて生ずる。觸とは知覺又は感覺のことであつて、これに依つて感情の生ずることを、觸に縁つて受ありといふのである。

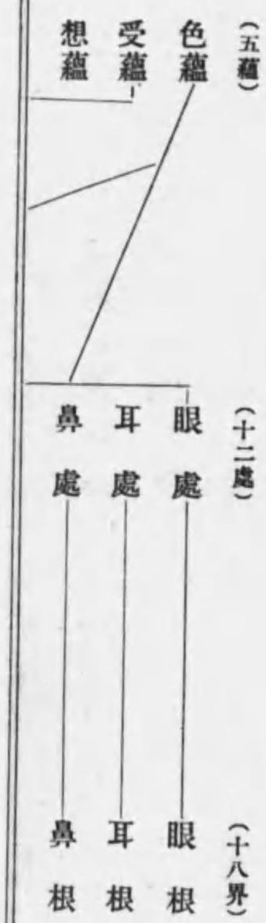
六處に縁つて觸

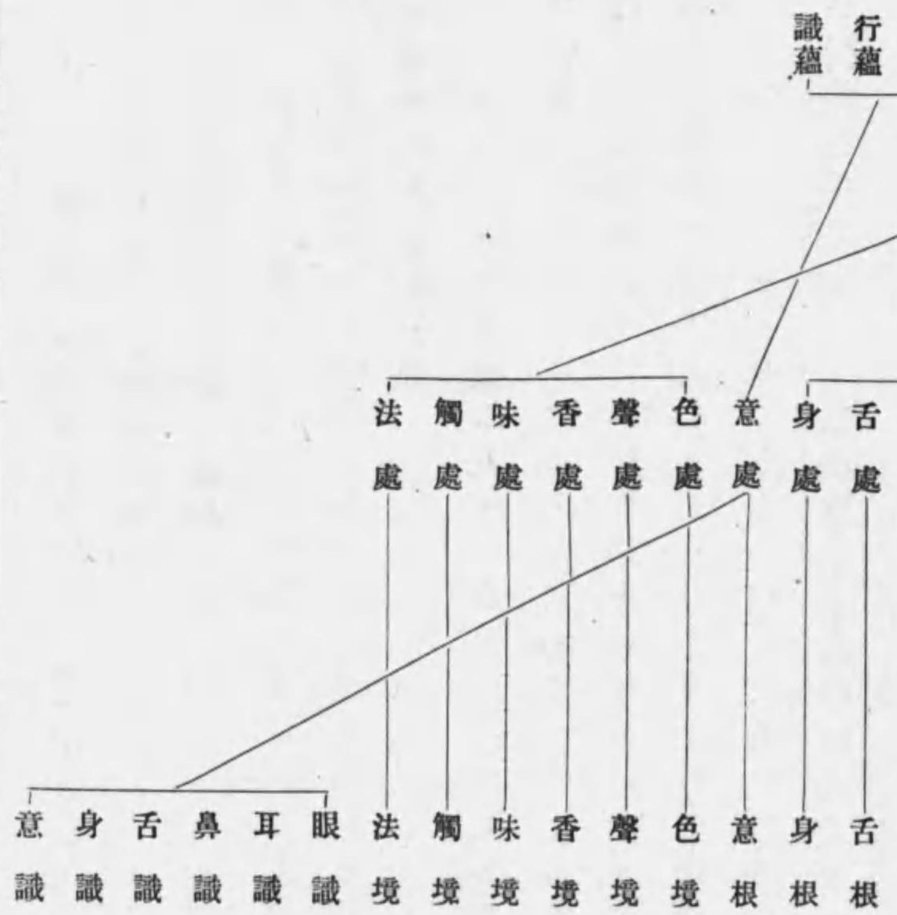
この知覺又は感覺は六處に縁つて生ずる。六處とは眼・耳・鼻・舌・身・意の六官のことでこれを六根ともいふ。普通の心理學では眼・耳・鼻・舌・身の五官のみをいふが、佛教では更に意を加へて六官とするのである。眼處は色處に對し、耳處は聲處に對し、鼻處は香處に、

十二處

舌處は味處に、身處は觸處に、意處は法處に對する。この眼・耳・鼻・舌・身・意は六內處といひ、又六根とも呼び、我々の主觀であつて、これに對する色・聲・香・味・觸・法の客觀の境を六外處又は六境ともいひ、これを十二處といふのである。又更にこれを眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六識と、眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根の六根と、色境・聲境・香境・味境・觸境・法境の六境とに細分して、合せて十八界といひ、次に說明する五蘊と共に、五蘊・十二處・十八界と呼ぶのである。

十八界





（註　五蘊の中、行蘊の中に受・想を除いた他の心所及び心不相應行法を含むとするのが、有部宗の教義であるけれども、今は其に依らない。行は思なりといふ解釋を取る。）

この外界に觸れる六つの官能がなければ、知覺・感覺の起る筈がなく、官能があつて初めて知覺・感覺が起るから、六處に緣つて觸ありといふのである。

名色に緣つて六處

この六處卽ち六官は我々の身體に緣つてあるので、身體がなければ有り得ないから、次に名色に緣つて六處ありといふのである。

五蘊

名色とは名は我々の精神作用をいひ、色は我々の肉體をいふのである。釋尊の教に依ると、我々の身體は色・受・想・行・識の五蘊の和合に緣つて出來たものである。色は肉體であり、受・想・行・識は精神及び精神作用である。色は地・水・火・風の四大より成るもの、受は苦樂の感情、想は外境を心に想ひ浮べる作用、行は思慮・決定する作用、識は精神である。この五つの要素が集つて我々の身體を作り、この身體があつて六處があるのであるから、名色に緣つて六處ありといふのである。

識に緣つて名色

次に名色は何に緣つてあるのか。識があるに緣つて名色がある。識とは心であり、精神である。身體があつてもそれを統一する心がなければ個體とはならぬ。心と身體は共に相緣つて個體をなすのであるから、識に緣つて名色ありといふのである。名色がなければ識がないこともいふまでもない。又名色の中には心作用をも含めてあるのであるが、中心の精神のみを別にして、識に緣つて名色ありというたのである。茲で心とも意ともいはず識といつたのは、識は了別するもので、精神の認識作用を顯はすので

心意識

ある。されば識は認識する主觀、名色は認識される客觀ともなり、主觀客觀の相互關係を顯はしてゐるのである。

行に緣つて識

この識は何に緣つてあるか。行に緣つてある。行とは業即ち行爲の意味であり、心が善惡いろ〳〵の行ひをなす作用があるのを顯はすのである。すべて存在するものには作用があり、作用のないものは存在しない。それで識というても、了別といふ作用があるので、識となり得るのであるから、この意味で行に緣つて識ありというたのである。

無明に緣つて行

次にその作用は如何なる作用であるか、如何にはたらくかを示して、無明に緣つて行ありというたのである。無明といふのは先にいふが如く、ものの道理に昏いこと、如實の相の見えないこと、更に明確にいへば、諸行無常、諸法無我の眞理を知らないことである。

即ち眞實の智慧を缺いてゐることである。この無知から作用を起す心を持つてゐるから、我々の生活は迷ひとなり、迷ひの生活であるから、生・老・病・死に囚はれて、愁へ、悲しみ、苦しみ、惱み、悶えねばならぬのである。

かくの如く我々の現在苦しみ惱んでゐることを、そのもとへもとへと遡つて、その原因を突きとめると、遂に無明に歸するのである。我々の心が無明、無智であるから、現在の苦しみ惱みを得てゐるのであると知るのが、この十二緣起の示す意義である。

かやうに源へ遡つて無明といふ最後の原因を見つけたのであるから、次に無明を無くすれば無明に緣つて起る行が無くなり、かくして行が無くなつて識が無くなり、識が無くなると名色が無くなり、名色が無くなれば六處が無くなり、六處が無くなれば觸が無

くなり、觸が無くなつて受が無くなり、受が無くなつて愛が無くなり、愛が無くなつて取が無くなり、取が無くなれば有が無くなり、有が無くなれば生が無くなり、生が無くなつて老死が無くなり、愁ひ悲しみ、苦しみ惱み悶えが滅び、茲に迷ひの生活は悉く無くなるのである。

凡夫と佛

凡夫の心は無明に覆はれ、貪愛に纏はれてゐるが故に、生老死を苦とし、迷ひの生活となり、佛の心は明かな智慧に滿ち、大慈悲に燃え給ふが故に、生老死を超えて悟りの生活となるのである。

第六章　三界唯一心

心は巧みなる畫師

前章の十二緣起の説明に依つて明かであるやうに、凡夫の迷ひも佛の悟りも心に依るのである。心が悟れば佛、心が迷へば凡夫、

心次第で凡夫ともなり、佛ともなるのである。

「心は巧みなる畫師の如し。種々の五陰を畫く。
一切世界中、法として造らざるものなし。
心の如く佛も亦爾なり。佛の如く衆生も然り。
心と佛と衆生と、是の三、差別なし。
諸佛悉く了知す。一切は心に從つて轉ず。
若し能く是くの如く解すれば、彼の人眞佛を見る。」

まことに心は巧みな繪かきのやうに、凡夫も畫けば佛も畫く。一切世界の中、ものとして造らぬものはないのである。心が凡夫をも造り、佛をも造るのであるから、心を介して凡夫も佛も差別はないのである。これが心・佛・衆生是三無差別である。すべて心に從つて生じて來るので、この意味を明かに知れば、悟りの道に入つ

信仰と病氣

たのである。眞に知り盡した人が佛と呼ばれるのである。

今この意味を具體的に味つて見よう。茲に二人の同じ病人があり、甲の人は日夜病氣を苦にして悲しみ、乙の人は病氣の與へる肉體の苦しみは受けても、心は悠々として樂しみ、看護の人達の親切を喜んでゐるとする。どうして同じ病氣が人に依つてかくも異なるのであらうか。それはいふまでもなく、心の修養の如何に依るのである。佛の慈悲を喜び、信仰によつて生活する人には、心の落ち付きがあるから、肉體の苦痛はやむを得ないとしても、それに依つて心まで苦しむといふことがなく、常に安らかな境地にゐることが出來るが、信仰のない人は病苦の上に心の苦痛を重ね、日夜懊惱するのである。心次第で病氣は苦痛ともなれば、喜びの種子ともなるのである。

修養のある心とない心

繪心のない人には春の野邊の紅紫黃綠いろ〳〵の色の配合も氣を引かないが、繪心のある人には心を躍らす美しさを感ずる。心ある詩人には名もない野邊の貧しい花でも、涙を誘ふ美しさがある。稱められる謗られるといふことも、修養のない心には大動搖を來すものであるが、心を練つた人は毀譽褒貶を超えて、動かない心の落ち付きを持つてゐる。何れも心が基であり、中心であり、心の色で物を染めて眺めるのが人間の生活である。されば世間でも心の持ちやう、心次第といふのである。生死事大、無常迅速、いつ死ぬか判らぬといふことは、凡人に取つては怖ろしいことであるが、煩惱を滅し、心を淨めた聖者は生死を超えて、死ぬも生きるも問題でなく、生命の限り生きるのであるから、生死は苦しみでは無くなるのである。

先に業と報とを說明したが（第四章）、こゝでも再び業を考へて見ねばならぬ。我々が欲を起して、他人の物を盜んだとする。他人が見てをれば、時には獄に繫がれるといふ結果にもなるが、もし誰も見てゐるものがなく、いつまでもそれが知られずにゐるとしたら、それはそれまでのものであらうかどうか。業の教理が示すが如く、業にはこの世で結果を現はすものもあり、後の世又はその次の世に於いて結果を現はすものもあるから、結局はその報を受けねばならぬ筈であるが、それのみではなく、その時盜んだといふ行爲は、必ず我々の心に曇りを殘すのである。この曇りは心を次第に變化せしめて、以前より暗い惡事を好むものにする。慣ひ性となるといひ、習慣は第二の天性であるといふのも、この業が我々の心に影響して、我々の心を次第に變化せしめることをいふのである。大體我々は心相應にものを見るものであるから、自分の業に影響せられて、次第に我々のものを見る見方も變化して行くのである。罪を犯したものは、誰を見ても若しや自分の所作に氣がついてゐはせぬかと疑ふ。人の足音にも若しやとおびえ、疑心暗鬼を生じて常に怖れ戰き、ばら〳〵した生活をせねばならぬ。心にやましいことのないものは、誰に對しても怖れ憚ることなく、晴れ晴れとしたすが〳〵しい生活をすることが出來るのである。同じ處に住み、同じ人に接して、怖れ戰き、ばら〳〵して生活するものと、朗かなすが〳〵しい生活をするものとの相違はどこにあるかといへば、矢張り心にあるのである。心の持ち方、心の如何に依つてかくも大きな相違が生れて來る。すると心はすべての根源であり、中心であり、心に依つてすべてのものが作られ、心に從つて

唯識

すべてのものが生ずるといつても差支ないのである。これを「三界唯一心、心外無別法」心の外に物はないといふのである。

この思想を基とし、教理として組織したのが無着・世親の瑜伽唯識教學であり、其を傳承したものが支那に於ける唯識宗、或は法相宗といはれるものである。

思ふに愚かな凡夫は、無始以來の虛妄分別の迷執の爲に、諸法は因緣に依つて生起し、識相としての顯はれであることを悟ることなく、「俺が、俺が」といふ我も、あらゆるものといふ法も實際に有りと遍執するので、生死に流轉して止む時がない。然るに聖者は、常に、諸法の行相は唯識であると智見するがゆゑに、外の實境としての執着を離れ、萬法唯識、心外無境の理に體達し、眞實心に住してゐるのである。而して、緣起の諸法が唯識として顯はれることは衆

心の改造

生の心（本識と轉識）よりの轉變なのであるから、この意味よりしても亦心外に別法無しといはれる。

既に心が中心であり、心が根源であつて、心の外に何物もなしとすれば、すべての問題はみな心に歸着するのである。改造といふことは外界を改め、境遇を變へて幸福になるのでなく、心を改め、心を清めて幸福になるのである。されば佛教の問題はみなこの一心に集つてしまふのである。

七佛通誡の偈

「諸惡莫作、
自淨其意、
衆善奉行、
是諸佛教」

七佛通誡の偈といはれるこの四句の偈文は、この意味を顯はしたものである。

第七章　因緣生

ものの生ずるには因緣あり

十二緣起は第五章に於いて示した如く、無明から老死に至る十二が相依り相關して成立し、我々凡夫の生活を作つてゐることを示したものであるが、更に廣く世の中に存在するあらゆるものを考へて見ても、すべて因緣に依つて成立してゐるものである。因緣を離れて存在するものは、天地間に一物もないのである。米や豆がどうして生ずるか、米や豆の種子がなければ生ずる筈がなく、又雨露・水土・日光の扶けがなければ生ずる譯がないから、米や豆は種子といふ因と、日光・雨露・水土の緣によつて生ずるものといはねばならぬ。この場合因とは、結果の米や豆に對して直接の原因であるものをいひ、緣とは、間接の原因であるものを指していふのである。

ものにも因緣あり

ものが生ずる、顯はれるといふ方面から見ても、因緣の力によつて生じ顯はれるのであるが、又ものがあるといふ方面から見ても、因緣によらないものはない。假りに茲に一人の男があるとする。その人は家庭に於いては、兩親に對して子であり、子供に對しては親であり、妻に對しては夫である。國家に於いては、上陛下に對しては臣民であり、國民である。又社會に於いては、共存共榮のための一社會人である。するとその人は兩親あつて子であり、子供があつて親であり、妻があつて夫であり、陛下が在せられての臣民であり、國家があつて國民であり、社會があり、あらゆる人、あらゆる制度・文化があつて一社會人であり得るのであるから、その人のあるといふことは、他のすべてがあるといふ理由であり得るのである。

眞の意味に於いて孤獨といふものはあり得ないのであつて、自分があるためには、一切のものがあらねばならぬのである。それであるから、自分の現在生きてゐることを感謝する心が、少しでもあるならば、自分をしてあらしめる他の一切の恩を思はねばならないのである。これが「心地觀經」に說かれてゐる四恩の意味であつて、四恩といふは、父母の恩・衆生の恩・國王の恩・三寶の恩である。

四恩

父母の恩

父母の恩は說明するまでもなく、父母なければ我身なく、又そ、の今日までの養育の苦勞を思へば、報じても報じ切れぬ大恩がある

衆生の恩

のである。衆生の恩とは今日の語でいへば社會の恩ともいふべく、交通が發達して世界中が非常に接近した今日では、世界中の人達の勞作がみな個人の上に影響して來るのであるから、社會の恩を思はねばならぬ。

國王の恩

國王の恩は陛下の御恩及び國家の恩惠であつて、陛下の國を治しめす大御心があればこそ、又世界に比ひのない日本國に生を受けたればこそ、安らかに生活することが出來るのであるから、陛下の御恩及び國家の恩惠を思へば、愈、奉公の赤誠をいたさねばならぬ。

三寶の恩

三寶の恩とは佛寶・法寶・僧寶の恩といふことで、この三寶あればこそ、我々は心の歸趣を得、信仰を得、高い文化に浴することが出來るのであるから、常に三寶の恩を思はねばならぬといふのである。又これを縱と橫とに分けて見ると、その人は時間的に過去の人々の苦勞の結果を一身に得、空間的に全社會の人々の勞作の結果を自分に得てゐる譯であるから、自分といふものは縱橫十文字の一焦點にあつて、他の恩惠の中心にあるといはねばならぬ。

以上は一人の人に就いて述べたのであるが、天地間のあらゆる

一切法因緣生

四緣

因緣

ものはみなこの關係にあるのであつて、一本のペン先を考へてみても、ペン軸・インキ・机・紙・人間その他あらゆるものの關係に依つて初めてペン先であり得るのである。即ち如何なるものも孤立して存在するものなく、獨りで存在するものなく、みな關係に依つてもちつもたれつして存在するのである。丁度網の目のやうなもので、一つの結び目があるためには、すべての結び目の張り合ふ力であり得るのである。これが佛教の一切法因緣生、因緣によつて生ずるといふ意味であつて、佛教では何物も獨存自在せずといふのである。これは佛教獨自の最も勝れた重要な教理である。

以上說くが如く一切法は因緣生であるが、更にこの因緣を細かに分けると、因緣・等無間緣・所緣々・增上緣の四緣となるのである。

因緣とは、ものが生ずるに就いて、親しくその因となるもののこ

等無間緣

所緣々

とであつて、種子を蒔いて米を得る、その種子を結果に望めていふのである。この場合の因緣は、前の一切法因緣生の因緣よりも狹い意味に用ひられてゐることを知らねばならぬ。

等無間緣とは心が生じ起るに就いていうたもので、二つの心は同時に起り得ないから、前の心が滅びた後に後の心が生じて來る。例へば書を讀む心と花を見る心とは同時に起らず、書を讀む心が終つて過ぎ去る處に、花を見る心が生ずる。書を讀む心の滅するのが、花を見る心の生ずる因緣となることを顯はしたものである。前の心の滅する等無間、即ち少しの間隔なしに後の心が生ずるのである。

所緣々とは、我々の心は、心だけで起るものではなく、心の對する境界がなくてはならぬ。見られるもの、聞かれるもの、嗅がれるも

の、味はれるもの、觸れられるもの、思はれるものの何れかゞあり、それに對して心が起るのであり、その對境を所縁の境といふのである。この所縁の境が心の起るのに就いて縁となることを、所縁縁といふのである。

增上縁

增上縁とは、ものの生ずるのに就いて、種子が因ならば日光・雨露・水土は縁である。この縁を增上縁といふのである。すべてのものがあるのに就いて、自體が自體のあるために因ならば、他のすべては增上縁となつてあらしめるのである。

（註　こゝに四縁に次いで六因をも出すべきであるが、六因四縁起は有部の教義で狹く、四縁は廣く各部派に通ずるから四縁のみを出したのである。）

第八章　實　相

一切皆空

一切法因縁生であつて、因縁に依つてすべてのものが生じ、顯はれ、又ものがあるといふ方面からしても、因縁に依らないものは、天地間に一物もないことを、前章に於いて說明したのであるが、是くの如く天地間のあらゆるものは、他を離れて唯それだけで獨立に存在するものではなく、必ず互に相依り、相扶けて成立するものであり、相互相關的に關係して、その關係の上に於いてのみ初めてその事物として存在するに外ならぬのである。凡夫はそれを實に體のあるものとし、法體として實在すると考へるのであるが、このやうに考へるのは、事物を相互相關的關係と全く切り離して見てゐるからであつて、かゝる自他對立の實在觀に立つ一般の考を否

龍樹の教學

八不中道

定して空であるとし、その對立的考を破つて一切皆空を高潮したものが、西紀三世紀の頃に現はれた龍樹の空觀の思想であるのである。龍樹は「般若經」の一切法空不可得の空觀の思想を承けて、その著「中論」に一切法を以つて不生・不滅・不斷・不常・不一・不異・不去・不來の八不として、悉くその諸法に對する生滅・斷常・一異・去來の執見を否定して八不中道說を主張したのである。元來あらゆるものを、生・滅・斷・常・一・異・去・來の八種の何れかに見るといふことは、あらゆる事物を個々的に存在するものと見る對立的な考の上に立つての迷ひであるから、この迷執を破らんが爲に八不と否定して、一切は自性（體）として無く空であるといふのである。然しこのやうに一切は空であるといふことになると、凡夫は又そこに何か空といふ物柄があるかのやうに考へるから、その迷執を破つて更に

空の意義

諸法實相

それも亦空であると否定して空空とする。それでは空といふことはあらゆるものの虛無の意味であるかといふに、決してさうではなく、獨自的な實體を有する諸法の無であることをいふもので、空と否定することによつて、そのまゝ一切の事物を肯定すること、否定の上に立つた肯定なのである。如何に空と否定し、更に空をも空空と否定しても、實際上諸法は何等の變化も受けなければ、又破壞し得られるものでもない。依然として本來のまゝに諸法として現はれてゐるのである。それであるから一切の事物を生と見、滅と見、或は有と見、無と見るなどの二つの立場を離れて、一層高い立場からすべてを見下しての見方が空觀であるのである。一切皆空と對立的なものの見方を破ることによつて、諸法の一々が全體的相依關係の中に融け込むと同時に、一々の事物が全體的關

聯を攝して現はれてゐることを顯はすのが空の眞の意味である。實際から離れて見るのではなくして、否定の立場で一切を肯定して諸法を安立するのである。これを諸法實相といひ、又非有非空の中道ともいふのである。かゝる高い立場から見下しての否定に立つてこそ初めて、すべてのものが眞に生きて、一法として棄つべきものなく、又一法として取るべきものもないといふことから、諸法實相を又眞空妙有ともいふのである。是の如くに一層高い立場からして、すべてのものを見下すとき、茲にすべてが淨化せられて、煩惱卽菩提、生死卽涅槃ともなつて、その生死も妙有としての生死であり、煩惱も亦妙有としての煩惱であるのである。

眞空妙有

天台の實相論

龍樹のかゝる空觀による諸法實相論に、更に一歩を進めたものが後の天台と華嚴の實相論であつて、天台にあつては我々の一念の妄心の中に三千の諸法が具つてゐるとゝもに、あらゆる事物は各々それ自身の中に三千の諸法を具有し、一色一香と雖も空・假・中の三諦の理を具して中道實相に非るはなしといふのである。

第九章　三法印

人生が苦であるとは既に前に述べたところであるが、一體その我々の苦しみは何がもとであるかといへば、我々の迷ひから起るものである。迷ひといふは、心が無明の闇に閉されてゐることであり、物の道理が解らないことである。それならば物の道理とは何であるかといふに、その根本についていへば、

第一に諸行無常

第二に諸法無我

諸行無常

といふことである。第一に諸行無常は世の中のすべてのものが遷り變る。何一つ常住不變のものはないといふことである。生れたものは死ぬ、造られたものは壞れる。盛な者は衰へる、集つたものは散り、會へば別れる。これは天地間の公理である。この公理を外れて常住なものは斷じてないのである。何が故にすべてのものは無常であるか。これは前に說明した通り、如何なるものも因緣生のものであつて、因緣によつて出來たものであるが故に、因緣によつて又滅するのである。花は咲いては散り、人は生れては死ぬ。咲くのも散るのも、生れるのも死ぬのも、みな因緣によるのである。諸行無常とは此ことを云ふたのである。

諸法無我

第二の諸法無我とは、一切の萬法、何ものにも「我」といふべきものはないといふことである。世間では「俺が」、「俺が」といふ。この「俺が」が即ち「我」である。この「俺が」が間違のもとであつて、我見・我慢を言ひ張つて、他人のいふことを聞かないのである。「俺が」といふ「我」の執着、「俺のもの」といふ「我所」の執着、この我と我所との執着が、人間世間の爭と惡のもとになつてゐるのである。

我と我所

常一主宰

一體我といふことには、常・一・主宰の三つの性質がなければならないものであつて、常は常住であり、「我」といふ以上常住でなければならぬ。變らないものでなければ、我と取り立てゝいふことの出來るものではない。然るに我々の身體も心も常住ではない。常に變りづめに變つてゐるものである。次に一でなければならぬ。完全な一體であつて、獨存してゐるものでなければならぬ。然るに我々は先にいふやうに、因緣によつて出來たもので、獨存ではなく、依存である故に一ではない。又我は主宰の力がなければ

ならぬ。我がこの身體を所有するのならば、我の思ひ通りに病むこともなく、年寄らず、苦しまないやうになつてゐねばならぬ。然るに事實この身體すら、思ふやうに行かぬとすれば、主宰の力もないとせねばならぬ。さうすると「俺が」、「俺が」といひつゝ、その「俺が」といふについて、大切な常・一・主宰の三つの性質がないのであるから、この身體の何處を探しても、「我」といふべきものはなく、「俺が」、「俺が」と固執すべきものはないのである。我がないから從つて我所もない。「俺のもの」と執着すべきものもないのである。世間普通に「俺」といふのは、因緣生の自分を忘れて、自分を常一主宰者のやうに誤解した考から起つてゐるのである。一切萬法、何ものにも「我」といふものはない。これが諸法無我である。

諸行は無常であり、諸法は無我であるのに、我々はこの道理を知

涅槃寂靜

四法印

一切皆苦

らず、常住であると思ひ、「俺が〳〵」というてゐる。これが迷ひである。この迷ひに依つて執着し、苦惱し、動亂してゐるのである。今このものの道理が解つて、悟り、即ち涅槃の生活に入れば、迷ひを離れるから、執着が無くなり、苦惱が無くなり、動亂が無くなり、寂靜になる。これが涅槃寂靜である。

この諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜を三法印といふ。この三法印に更に一切皆苦の一つを加へて、諸行無常・一切皆苦・諸法無我・涅槃寂靜を四法印ともいふのである。四法印は三法印の中の諸行無常を開いて、諸行無常・一切皆苦の二つとしたもので、一切皆苦とは、先にも述べたやうに、人生のあらゆるものが、すべて變りづめに變り、其が我々の常住を樂ふ心と背反するからとすれば、この移り變るといふ人生のすべてが樂しいものである筈がない。即ち無常

大乘小乘

三乘

なるが故にすべては苦であるといふのが、一切皆苦の意味である。三法印といひ、四法印といふこれは、三つの旗印、四つの旗印といふ意味であるが、何の旗印かといふと、佛教の旗印、佛教の佛教たる所以は、この三つの教理、乃至四つの教理を說くにありといふのである。佛の教に大乘、小乘の區別があり、日本の佛教は今十三宗五十六派に分れてゐるが、佛教である以上、すべてこの旗印を揭げてゐるのである。こゝに大乘、小乘といつたが、乘は乘物の意味で教法のことであるがその乘物に依つて悟りの世界に入ることを顯はし、小乘は自利のみを知つて利他を忘れた人達の教、大乘は自利利他兼ね具へた勝れた人達の承ける教といふことである。

又その佛の教を承ける人に、聲聞・獨覺・菩薩の區別があり、聲聞は佛の教を聞いて悟りを開くが、自利一方の人、獨覺は獨り法を觀じ

四聖諦の順序

て悟りを開くが、これも利他を行はない人、菩薩は眞に佛の教を得、自利利他兼ね具へた修行を爲し、衆生救濟の大活動をする人のことである。これを三乘といふのである。

我々は大乘の菩薩の精神を忘れず、菩薩の心を以つて心として、道に進む決心を忘れてはならぬ。

第十章　道　（上）

我々が人生苦のありのまゝの姿を眞實に知れば、そこに髣髴として苦しさ惱ましさのない理想の境地を想ひ起すことは、理として當然のことである。又人生の苦惱を生じた原因が、自分にあることを知れば、猶更その苦しさ惱ましさのない境地は理想として輝き出し、この境地に到るために修行するに至ることもいふまで

もない。苦しさ惱ましさのない境地とは、涅槃のことであつて、これを滅諦といひ、この涅槃を實現實證する修行を道諦といふのである。それで四諦は苦諦・集諦・滅諦・道諦の順序となるのである。

苦諦―人生の苦惱――我々が知るべきもの。

集諦―人生の苦惱の原因、即ち自分の煩惱――我々が斷ずべきもの。

滅諦―人生苦の原因である煩惱を滅し、苦惱の盡きた境地―我々の證るべきもの。

道諦―涅槃に到る修行、即ち道――我々の修むべきもの。

それで既に苦諦・集諦の概略を說き終つたから、次に第三の滅諦を說くのが順序であるが、こゝでは便宜上道諦の修行を說いて、後にその修行によつて得られた滅諦の境地を說かうと思ふ。

信仰

三寶の信

如來の十號

「佛法の大海には信を以つて能入と爲す」といはれ、また「信は道の元、功德の母」といはれてゐるやうに、佛を信じ、佛の說かれた敎法を信ずるといふことがなければ、その敎の通りに修行するといふことがある筈がなく、從つて悟りを開く筈もないから、信が修行の源、修行の原動力であることはいふまでもない。

然らばその信とは何を信ずるのかといふに、佛を信じ、法を信じ、僧を信ずるのである。如何に佛を信ずるかといふに、如來は應供者・正等覺者・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊に在します。一言にしていへば「悟りを得給うた方」と信ずるのである。

應供者とは世間の供養を受ける價値ある人といふこと。

正等覺者とは悟りを開かれた人といふこと。

明行足とは智慧と修行とが圓滿に具つた人といふこと。

善逝とは幸福この上ない人といふこと。

世間解とは世間のことを知り盡した人といふこと。

無上士とは世に並ぶ人、上超す人のないといふこと。

調御丈夫とは人間を巧みに制御する人といふこと。

天人師とは人間天人の師匠といふこと。

佛とは覺つた人といふこと。

世尊とは世の尊敬を受くべき人といふことである。

次に法を信ずるとは、佛をかくの如く信じて、法は、この佛に悟られ說かれたこの上ない尊い教法であると信ずるのである。僧を信ずるとは、世尊の弟子である僧伽の人達は行ひが正しく、教の如く道を守り、善く教法を傳へる人々であると信ずるのである。この

三學

信と行

戒律

五戒

佛・法・僧の三寶を信ずることが源となり、原動力となつて、次に自分の身を修め、佛の命じ給うた戒律を正しく守り、更に定に入つて心を統一し、かくて正しい眞實の智慧を得る。この三寶に對する信を出立點として、戒と定と慧との三學の行の實踐によつて、涅槃に入ることが出來るのである。

次に佛の命じ給うた戒律とは如何なるものかといふに、先づ一般にすべての人に通ずるもの、即ち佛敎徒たる以上守らねばならぬものをいふと、

不殺生。生き物の生命を取らず、慈深く厚い同情の心を以つて他に對すること。

不偷盜。與へられないものを取らず、足ることを知り、正直に生活すること。

不邪淫。邪な淫行をなすことなく、行ひを慎むこと。

不妄語。知つて虚妄の語を吐くことなく、正直に眞實を守ること。

不飲酒。酒を飲まず、眞面目に勤勉に修行すること。

の五戒である。猶、出家となれば、出家として守らねばならぬことがあり、國體生活に於ける規約もあつて、複雜な戒律もあるが、それらの戒律を守り、教令に遵うて進むと、心にやましいところがなくなり、身も暢かになり、從つて心の統一を得るに至るのである。

定

三昧

定はこの心の統一を得るためのものであつて、心が亂れてゐては正しい考、善い智慧も生れないから、佛道修行にはこの定は缺くことの出來ないものである。定は三昧とも書き、心の集中といふ意味であつて、坐禪をして身を端しくし、心をある一點に集中する

禪

禪宗

慧

般若

ことである。禪は定とは原語を異にするが、靜慮即ち靜かに考へることであつて、定と同じいものであるから、禪定とつゞけていふこともある。かの菩提達磨によつて支那に傳へられた禪宗はこの禪三昧に入つて悟りを開くことを高潮した宗旨である。

かくの如く身を靜かにし端しくし、心をある一點に集中して靜かに考へるのは何のためであるかといふと、正しい眞實の智慧を得るためである。眞實の智慧とは世間でいふ物知りといふ知識のことではなく、人生を知る眞の智慧のことである。苦諦を知り、集諦を知り、滅諦を知り、道諦を知る智慧であつて、これを原語のまゝに用ひて般若ともいふのである。

眞に世の中が無常であると知れば執着がなくなる。執着がなくなれば繫縛を離れることが出來る。眞に自分の苦しみ惱みが、

自分の責任であり、業の結果であると知れば、他人を責めることなく、自分の責任を感じて自分を磨き、道に進むやうになる。そのため今までの他人を怨み、そねみ、妬んだりしたことが無くなる。これが解脱であり、悟りである。それであるから眞實の智慧を開くといふことが、悟りを得ることであつて、このために戒を修め、定を修め、慧を磨くのである。

以上説明し來つたところで明かであるやうに、佛教の修行は信に初まり、戒・定・慧の三學を修めることであるが、更にこれを今少し委しく説明すると、五根・五力・七菩提分・八正道等に分れるのである。

五根

五根とは信根・勤根・念根・定根・慧根であり、信根は先に説明した信仰であり、勤根は勤め勵むこと、念根は自分のしたことを正しく記憶すること、定根・慧根は先に説いた定と慧である。この五つは悟

りを得るに就いてなくてはならぬ道具であるから根といふのである。

五力

五力は五根と同じい五つを信力・勤力・念力・定力・慧力と呼ぶのである。この五つが悟りを得る大切な力となることを示したものである。

七菩提分

七菩提分とは七覺支ともいひ、念菩提分・擇法菩提分・精進菩提分・喜菩提分・輕安菩提分・定菩提分・捨菩提分であつて、念菩提分は先の念根に同じく、擇法菩提分は智慧を以つて眞僞・善惡を擇び分けること、精進菩提分は先の勤根に同じく、喜菩提分は心眞理に契うて喜びを得ること、所謂法の喜びである。輕安菩提分は心輕く安らかなこと、定菩提分は先の定根に同じく、捨菩提分は苦樂・怨親を離れて心平等に住することである。この七は菩提即ち悟りを得る

八正道

に必要な肢脚である故に菩提分といふ。分は肢脚の意味である。

八正道といふのは正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定であつて、正見は邪見に對し正しい見解、見方を持つこと、正思は邪思に對し正しい思惟、正しい考へ方をすること、正語は邪語に對し、正しい語、即ち妄語・綺語・惡口・兩舌を離れて、眞實を語り、柔和な語を語ることである。正業は邪業に對し、正しい眞直な行ひをなすこと、正命は邪命に對し、正しい生活をなすこと、正精進は邪精進に對し、先の勤根に同じく、正しい適度の勤勉をいひ、正念は邪念に對し、先の念根に同じく、常に正しくはつきりと記憶してゐること、正定も邪定に對し、先の定根に同じく、身を靜かに心を一點に集中することである。

中道の修行

佛教の修行は苦行ではないから、徒らに自分の身心を苦しめるのでなく、又世間の生活のやうに、欲に耽つて肉體を樂しませるのではない。この二つの極端を離れた中道の修行であつて、法の器としてのこの身體を大切にし、健全な身體に依つて、健全な心を得、心を靜め、注意を一點に集中して眞の智慧を得て悟りを開くのである。

上求菩提
下化衆生

第十一章　道（下）

以上述べたところの修行は、專ら自分の身を修め、心を練ることを示したものであるが、佛道の修行はそれだけではない。各個人が各自の心身を修めると共に、進んで他の人々に對して慈みの心を以つて向ひ、利益を計らねばならぬ。佛教の修行を一言にしていへば、上求菩提・下化衆生といふ。上求菩提は自分自らの悟りを

求めることであり、下化衆生は他の一切の人々を化益誘導して悟りに向はしめることである。この上求菩提と下化衆生の二が相俟つて初めて完全な佛教の修行となるのである。四攝事・四無量心はこの下化衆生の心の顯はれであり、十波羅蜜はこれを具足した上求菩提の修行である。

四攝事

四攝事とは布施・愛語・利行・同事であつて、布施は他に對して慈みの深く、己の持つてゐるものを惜氣なく施すこと、愛語は和顏愛語で他に對して柔和に荒々しい語を用ひぬこと、利行は他人の利益になるやう計らふこと、同事は他と事を同じくすることで、子供には子供になり、老人には老人になつた氣持で交ることである。佛も衆生を救濟せられるには和光同塵を以つて結緣の初めとせられるといふ。

和光同塵は結緣の初め

和光は光を和げること、佛の輝く光を隱して衆生の近づき得るやうにし、同塵は衆生の塵に交つて緣を結び給ふといふのである。

四無量心

四無量心とは慈無量心・悲無量心・喜無量心・捨無量心をいひ、慈は拔苦、悲は與樂、あらゆる生物に對して、慈みの心、憐み愛する心を漲らし、その心を全世界に溢れしめるを慈無量心・悲無量心といふ。喜は隨喜で他の幸福を見て喜び、他人の善事をするのを見て喜ぶこと、捨は怨親愛憎を超えて心の平等不動であるのをいひ、この隨喜と平等の心を全世界に溢れしめるを無量心といふのである。

自利と利他

要するに、これらは、母が一人子に對するやうな慈愛の心を以つて、すべての生物に對することであり、この大心を具へて身を修めればこそ、佛道修行者といはれるのである。自ら我が身を修めるのは自利であり、他の人々の利益を思ふは利他である。佛教の求

道はこの自利と利他とを兼ね具へたものであつて、決して何れの一つをも缺いてはならない。この自利と利他とを具へた方面からして、佛教の修行は次の十波羅蜜であるとせられてゐる。

十波羅蜜

十波羅蜜とは布施波羅蜜・持戒波羅蜜・忍辱波羅蜜・精進波羅蜜・禪定波羅蜜・智慧波羅蜜・方便波羅蜜・願波羅蜜・力波羅蜜・智波羅蜜であつて、波羅蜜といふは具さには波羅蜜多といひ、到彼岸と翻譯し、これらの修行によつて、迷ひの岸を離れて悟りの彼岸に到るといふ意味である。また簡單に度と譯することもあるが、同樣の意味である。

布施波羅蜜

第一に布施波羅蜜、布施とは他の人々・生物を憐み、惠み施すことである。

財施

これに財施と法施と無畏施との三種がある。財施は貧しい人に金錢を施し、病人に藥を施す等、財物の施與であり、

法施

法施は人々に法を說き聞かせて、悟りを得させることとてあり、

無畏施

無畏施は、ろ〳〵な畏れに脅やかされてゐる人々に、慰安を與へ、安堵せしめることである。

施者と受者と施物を見ず

この財施・法施・無畏施の何れかを他に施しても、自分が施したといふ考のある中は、よい布施ではない。施して施した報酬を待ち設けるやうでは、純粹清淨なる布施ではない。施者も受者も施物を見ないやうになり、施した報酬を望まず、施したことをも忘れるやうになつてこそ、よい布施であり、布施波羅蜜と呼ばれるのである。佛教の布施はこの清淨なる布施でなければならぬのである。

持戒波羅蜜

第二に持戒波羅蜜、これは前に擧げた戒律を守ることであるが、非を防ぎ惡を止めると共に、自ら言行を正しくし、他人の模範となること。而も自分の德に誇らず、善に眼を留めないのが持戒波羅

蜜である。

忍辱波羅蜜

第三に忍辱波羅蜜、忍辱は堪へ忍ぶことであつて、他人の嘲罵、侮辱にも怒らず、如何なる苦難にもよく堪へて、心平かに快活を失はぬことである。波羅蜜といはれる譯は、前のやうに自分の忍辱に眼を留めず、忍んで而も忍ぶことを忘れるからである。

精進波羅蜜

第四に精進波羅蜜、精進は前の勤と同じく、勤め勵み、緊張してゐることで、波羅蜜といはれるのは、矢張りその德に眼をつけないためである。

禪定波羅蜜

第五に禪定波羅蜜、これは前の定に同じい。

智慧波羅蜜

第六に智慧波羅蜜、これは又般若波羅蜜ともいはれ、既に慧の所で說明したもので、よくものの道理を了解し、妄分別を離れるが故に、何ものにも縛せられることなく、解脫を得るのである。

方便波羅蜜

第七に方便波羅蜜、方便はてだて、手段といふことで、他人を導き、道に入らしめるにはてだてに巧みでなければならぬ。この方便を具へて缺ける所のないのをいふのである。

願波羅蜜

第八に願波羅蜜、一切衆生を救ひたいといふ願ひを有すること、換言すれば最も勝れた願ひを有することである。

力波羅蜜

第九に力波羅蜜、他の人々の利益を計り、道に入らしめ、悟りを開かしめるに就いて、十分の力を蓄へることである。

智波羅蜜

第十に智波羅蜜、これは他の人々の人格を磨き、完成せしめるに就いて、十分細心の用意と智慧とを有することである。

六波羅蜜

以上の十波羅蜜の中、第六の智慧波羅蜜が中心であつて、方便・願・力・智の四波羅蜜はその中から流れ出るものであり、從つて後の四波羅蜜を略して六波羅蜜とすることもある。この六波羅蜜で自

利利他具足してゐる修行であるけれども、十波羅蜜と開く時には、後の四波羅蜜は特に利他のみになり、佛の命じ給ふところの自利と利他とを兼ね具へた眞の修行になるのである。

第十二章　菩薩の精神

菩薩

菩薩とは悟りを求める人といふことで、佛の足跡を踏み佛の後を逐うて、佛の覺り給うた悟りを求めるのが菩薩である。即ち佛道を修行する人のことである。

四弘誓願

旅をするに目的を立てて出發すると同じく、修行にも目的を立てて發心するのであるが、その目的は佛の覺りであり、發心は先に述べた上求菩提・下化衆生である。菩薩はこの發心をする時に四つの大願と誓とを立てる。それは大きな願ひであると共に、必ずその願ひを成就するといふ誓を伴ふが故に四弘誓願といふ。即ち衆生無邊誓願度・煩惱無數誓願斷・法門無盡誓願知・佛道無上誓願證がこれである。

八萬四千の法門

地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道に住む衆生はその數限りなく、迷ひを重ねて苦しみ惱んでゐる。この數限りなきあらゆる衆生を生死の苦しみから救ひ出したいといふのが、第一の衆生無邊誓願度である。

迷ひに迷ひを重ねた我々の煩惱は數限りもなく、念々刹那に起す心はみな煩惱妄念である。この數限りない煩惱を悉く斷じ盡さうといふのが煩惱無數誓願斷である。

煩惱が數限りもない故に、その煩惱を滅ぼす爲の教も數限りもない。八萬四千の法門といふが、煩惱を八萬四千と數へるから、法

門も八萬四千といふのである。この數限りない法門を知り盡さうといふのが、法門無盡誓願知である。

佛の悟りは高くこの上なく最勝である。この最勝の悟りを得ようといふのが佛道無上誓願證である。

菩薩はこの四弘誓願を立て、その成就のために精進するのであるが、その成就はまことに容易ではない。この容易でない有樣を顯はしたのが次の物語である。

雪山童子

昔印度のヒマラヤ山に一人の修行者があつて、雪山に住んでゐたから雪山童子と呼ばれ、あらゆる艱難と戰つて道を修めてゐた。天の神々はこの童子の熱心な修行を見て、ある神は天界に生れて天の幸福を得るであらうと評し、ある神は彼は菩薩であるから、佛の悟りを目的とするものであらうといひ、種々に批評してゐたが、

いろは歌の根源

神々の王である帝釋天は童子の心を試めさうとして、姿を羅刹に變へて童子の前に立ち、

諸行無常　いろはにほへと、ちりぬるを
是生滅法　わがよたれぞつねならむ

といふ二句の偈を唱へた。童子はこれを聞いて大いに驚き、これこそ今まで永く求めてゐた眞理である。今この眞理を聞くことを得たのは何といふ幸であらうか。然しこれは偈文の半分である。若し他の二句、それで尊い眞理が滿面に顯はれる二句を聞くことが出來れば、自分の永い間の目的を果すことが出來るのであると、羅刹の前に進み、後の二句をと願つた。羅刹はいふやう、「私は數日食を得ないで飢死にしさうである。どうして他の二句をいふことが出來よう」童子は「もし後の殘りを聞くことが出來れ

ば、如何なる食物でも捧げよう」と。羅刹の求める食物は温い血と肉であることを知つて、後の偈を聞いたならば、喜んで羅刹の食とならうと約束した。

羅刹は

生滅滅已　うゐのおくやまけふこえて
寂滅爲樂　あさきゆめみじゐひもせず

と口吟んだのである。これこそ佛の教の本義である。何物も因緣に依つて生じたものであるから、また因緣に依つて滅びねばならぬ。今まで生を願ひ滅を嫌うてゐたゝめに、生滅の分別に囚はれて自由の境地を得なかつたが、生ある者は必ず滅する。この眞理に隨うて執着を離れゝば、自由にして碍りなく、この上なき樂しみが得られるのである。何といふ尊い法であらうか。一朝に道を

尸毘王

聞かば夕に死すとも可なり。」約束の如くこの身を羅刹に供養しようと、身を切つて血を出し、血を以つてこの四句の偈を石や樹に書きつけ、樹に登つて身を躍らせ、羅刹に一身を與へたのである。童子の大きな心と、眞理を求める熱心とを見屆けた帝釋天は、茲に本の形に還つて、童子を雙手に受けて靜かに地上に置き、その志を稱讃して去つたのである。

昔慈悲深い王者があつて、尸毘王と呼ばれた。人々の求めるものは何でも施し、憐な人々を救ふのを喜びとしてゐた。天の神々は、尸毘王は或はその布施の功德によつて天に生れ、神々の地位を奪ふのではないかと危ぶみ、この心を試さうと、て一人の神は鴿となり、一人は鷹となり、鴿は鷹に追はれて王の懷に逃げ込んだ。これを見た鷹は王に鴿を返してくれと强請した。王は自分の懷へ

飛び込んだ以上返すことは出來ぬといふ。鷹は自分の食は鴿であつて、餘肉を用ひないから、若し强ひて王が鴿を救ひたいとならば、王の肉を割いて秤にかけ、鴿と同じ分量だけを下さいと願ふ。王はこれを諾して髀の肉を割き、秤にかけると如何程髀の肉を加へても鴿の目方が重く、遂に侍臣に自分を殺し全身を秤に入れるやうにと命ずるに至つたが、少しも悔いる樣子がないので、神も茲に初めて王の佛道修行にいそしみ、布施波羅蜜を滿してゐられることを知り、慚謝して王の身體を原の通りにして返したといふ。

六牙の象

昔六本の牙ある大象が五百の象を率ゐて林に悠遊してゐた。ある時一人の旅人が林に行き暮れて困つてゐるのを見て助け、食を與へ道を教へて町に歸らせたが、王妃は夢に六牙の象を見て、その牙を得たく思ひ、頻りに王にせがみ、王も止むなく國中に命じて

六牙象を知る者を求めると、旅人は象王の恩義を忘れ、王に告げてその六牙を取つて來ることを約した。彼は象王の戒を守るを知り、衣を着て象王に近づき、毒矢を射て坑に隱れた。象王はこれを知つてその譯を尋ね、牙を求めることを知つて、自ら六牙を折つて與へ、且つ道を逆にして行き、足跡を殘さぬやう、他の象の復讐に遇はないやうにと注意を與へて死んだ。象王は死を以つて不殺生の戒を守つたのである。

忍辱仙人

昔、山に忍辱仙人といふ修道者が住んでゐた。佛の教を守り、忍辱波羅蜜を修めてゐた。ある時王が鹿を逐うて仙人の傍に來り鹿の行衛を尋ねた。仙人はこれを教へれば鹿は生命を失ひ、王は惡をなす事になるので默して答へない。幾度請うても教へない。王は怒つて飽くまで教へなければ汝を斬るまでだといふ。仙人

は仕方がないと答へる。王はその名を尋ね、忍辱仙人との答を聞いて、右の臂を斷ち截り、これでも猶忍び得るかと詰つた。仙人はもし私が道を得たならば、先づこの王を救はうと誓ふ。王は更に左の臂を斷ち、次いで脚を截り、耳を截り鼻を切り、血は泉のやうに流れる。されど仙人の心は少しも動かない。天地の神々は集つてこれを見、怒つて王を殺さうとしたが仙人は許さない。平素仙人を敬ふ人々も變を聞いて集まり泣き叫んで、截られた臂をとると不思議や臂から白い乳が流れた。それは仙人が平素母の如く人々を愛したことの眞實の顯はれであつた。仙人の弟も亦兄の變を聞いて馳せつけ、もしや兄の心が不幸に遇うて變りはせじやと悲しむと、仙人は我が忍辱の心は少しも變らない。截られた手・脚・耳・鼻をつげばもとの如く癒るのがその證據であるといひ、その

鴿の精進

通りにすると傷もなく癒つたといふことである。

昔一羽の鴿が大きな林に住んで、その林に實る木の實を食べて、何不自由なく暮してゐた。ある年旱（ひでり）の後に大風が吹き、枝と枝とが擦れ合うて火を發し、またゝく間に火が燃え廣がつて大火となつた。炎々と燃え上る火に鳥も獸もあわてゝ逃げ出したが、その鴿のみは平素林が棲を與へ、食物を與へてくれた恩義を思うて逃げず、近くの池に身を浸しては翼を濕し、火の中へ飛び込んで消火に努めた。林の大火はどうして鴿の身一つで防ぎ得よう。然し鴿は少しも疑はず恐れず懸命に働いた。帝釋天はこれを見て大に動かされ、鴿の處へ來てその志を聞き、力を貸して林の火を消すに至つた。

群盲模象

昔佛教に厚く歸依した大王があつて、眞實の智慧を有し、法の如

く國を治めてゐられたが、大臣初め多くの臣下は、小さな分別の智慧に滯り、互に爭うて憍りたかぶつてゐた。王は臣下の眼を醒すために命じて、國中の盲者を集め、象を與へて象の如何なるものなるかをいはしめた。盲人達は急いで象に取りつき、脚を持つものは、象は桶のやうなものといひ、尾を持つものは箒のやうだといひ、尾のもとを摩でるものは杖のやうだといひ、腹を摩でまわすものは大皷のやうだといひ、脇腹に觸る者は壁のやうだといひ、背を摩でる者は机のやうだといひ、耳を持つ者は簸のやうだといひ、鼻に觸る者は繩のやうなものだといひ、互に云ひ相爭うた。王はこの樣子を見てゐる臣下達に小さな智慧に憍る者はこの象を模索する盲目達のやうなもので、眞實の智慧は容易に得難いものであることを教へられた。

分別の智慧

昔長者があつて妻を迎へ、睦じく暮じてゐたが、ある時藏に行つて酒を持つて來るやうに命じた。妻は酒藏の瓮を開き、自分の影の映つたのを見て、夫に隱し妻があると疑ひ、これを夫に詰つた。長者は怪んで自ら瓮の蓋を取ると、今度は男の自分の影が寫つたので、妻に對して隱し男のあることを責め、互に醜い爭ひを續けた。そこへ平素長者の供養を受ける一人の出家が來て、爭ひの理由を尋ね、自分で行つて見ると、出家の姿が寫つたので、長者は不斷自分に隱して供養してゐる出家があると怒つて去つてしまつた。次に一人の尼が來てこのことを聞き、自分もその瓮を覗き込み、尼を見出しこれも欺かれたと腹を立てゝ立ち去つた。

最後に一人の賢者がこのことを聞き、自らこれを視て、みな自分の影に欺かれてゐることを知り、夫婦を呼び瓮の中の人を出して

佛教徒の精神

やらうと、大石を以つて瓮を打ち割りその實際を知らしめた。

世の中の人々はみなこの自分の幻影に欺かれて怒り腹立ち、爭ひ戰うて惡業を積み、迷ひを重ねてゐるのである。

以上の物語は佛教の修行が如何なるものであるかを示し、最後の二つの話は、眞實の智慧が如何なるものかを教へてゐるのである。そしてこの物語から教へられるものゝ中で、特に我々の忘れてならぬことは、佛教の求道、修行が自分の爲のみ、即ち自利のみではいけないので、他人の利益を思ふこと、

「願くはこの功德を以て、　平等に一切に施し
　　安樂國に往生せん。」

同じく菩提心を發して、自分の修めた善根功德を、人々に廻向して、同じく悟りを求める心を起さしめるといふ、利他の精神に燃えてゐるといふことである。

滅諦

涅槃

我々佛教徒は、この大乘の精神を忘れず、菩薩の心を以つて心として、道を求め、世の中のため、國のために盡す決心を忘れてはならぬ。

第十三章　さとり

人生の苦を感じ、その苦しみ惱みの原因が、自分の心の煩惱にあることを知つた我々は、當然その苦しみ惱みのない境地を理想として、自分の煩惱を無くしようと勤むるべきである。この煩惱を無くしようと勤めることは、四聖諦の中の道諦であつて、既に前に說明し終つたのであるが、その苦しみ惱みのない悟の境地、即ち理想の境地が滅諦である。滅といふのは苦しみ惱みが滅して無くなつたことを顯はすのである。この境地を涅槃といふ。

涅槃は梵語の音譯であつて、これも滅と翻譯せられるが、意味は煩惱の滅び盡した境地といふことである。

この煩惱の滅び盡した境地には、一切の繫縛がない。何ものにも縛られるといふことがない。自由にして礙りがない。これを解脫といふのである。我々凡夫の境涯では、見るもの聞くもの、あらゆるものに縛られて動きがとれない。何故縛られるかといへば、欲があるから、その欲に引かれて執着し、外物に縛られて自由を得ることが出來ない爲である。この欲を滅ぼし、執着を離れて、すべての繫縛を斷ち切つて自由になつたのが解脫である。

又この涅槃の境地は我々の心を支配してゐた無明煩惱が滅びて、明かな智慧が輝き出たところであるから、菩提即ち悟を開いた境地ともいはれるのである。

解脫

菩提

成道と涅槃

涅槃は煩惱が滅びたといふ意味、解脫は繫縛を斷ち切つて自由になつたといふ意味、菩提は無明の闇が晴れた悟の意味で、その意味は少しく違ふが畢竟我々のめざす理想の境地を詮はしたものである。

それであるから、涅槃といふのは普通考へられてゐるやうに、死ぬことでは決してない。悟りを開いたことが涅槃であつて、釋尊でいへば三十五歳成道の時に、涅槃にお入りなされたのである。三十五歳から八十歳までの佛陀としての生活が涅槃の生活である。苦しみと惱みの原因である煩惱を滅ぼし、苦しみと惱みとを離れ、一切衆生の爲に法を說き、道を敎へ、利他の大活動をなされたのが、釋尊の涅槃の生活である。

生前の涅槃

既に生前に悟りを開いて、涅槃の生活に入られたのであるから、

死後も亦その涅槃の連續でなければならぬ。生前には如何に心の苦しみ惱みを滅ぼしたとはいへ、前生の業に依つて受けたところのこの肉體のある以上、肉體の病苦、老苦は受けねばならぬ。我々の境涯では身體の苦しみは直ちに心の苦しみとなり、二重三重に苦しみ惱みを受けるのであるが、悟りを開いた聖者は身は病んでも心は病まず、身は老いても心は老いず、身體の病苦・老苦のために心が煩はされることがない。これが生前の涅槃である。

死後の涅槃

死後の涅槃は前生の業によつて受けたところのこの身體を捨てゝ入る涅槃である故に、今は身體の病苦・老苦もなくなり、心身共に靜寂の大涅槃となるのである。

有餘依涅槃

されば生前の涅槃を有餘依涅槃、死後の涅槃を無餘依涅槃といふのである。

無餘依涅槃

依とは依身の意で身體のこと、身體が殘つてゐる故に有餘依涅槃、身體も無くなり、すべて迷ひの跡かたも無くなつたのを無餘依涅槃といふのである。

般涅槃

普通、釋尊が八十歳でこの無餘依涅槃に入り給うたことを、般涅槃の語を以つて表はすのであるが、般涅槃とは完全な涅槃の意味で、これがもとゝなつて、入涅槃とか、涅槃の雲にかくれるとかいへば、死を意味するやうになり、成道は三十五歳の時の悟りをお開きなされたこと、涅槃は八十歳にておかくれなされたことを意味するやうになつたのであるが、もと〳〵涅槃は死ではなくて、悟りの生活のことであるといふことは明かになつたであらうと思ふ。

涅槃は清淨な心の生活

然らば次に悟りの生活である涅槃の內容は如何なるものであらうか、少しくこゝに說明しよう。

涅槃とは先にいふが如く、煩惱の滅し盡きたことである。煩惱が無くなつたといふは、煩惱の根本である無明の闇が晴れ

て、明らかな智慧が生じたことである。智慧が明らかになつたから、物の道理に迷はず、我見・我執を起さず、動亂の原因である迷ひを離れてゐるから寂靜であり、澄み切つた清淨な心で、悠々自適の生活をするのである。

涅槃は法爾自然の生活

次に涅槃の生活だからというて、生きてゐる以上は身體の苦しみを避けることは出來ない。又人間界のいろ〳〵ないざこざを離れることは出來ない。死も亦免れる譯には行かない。身體の苦しみもあり、種々な問題にぶつゝかり、死も亦止むを得ないが、悟つた人は何事にも煩はされないのである。絶待の心の自由を得てゐるのである。生れた以上死なねばならない、その道理に逆らはないで、敢へて生を希はず、死を怖れず、充ち足る現在に落ちつき、生死にあつて而も生死に驚かず、これを超脱してゐるのである。

涅槃は大悲の生活

生死をすら超脱してゐるから、決してそれ以下の苦しみや惱みの問題に心を煩はさず、願はしい事にも心を動かさず、厭はしいことにも心を激動させず、任運自在に生きてゐるのである。これが即ち法爾自然の生活である。

かうした自由の生活をしてゐるから、世間とかけ離れた冷い枯木寒巖のやうなものかといふと、決してさうではない。悟つた人の心は更に強く世の中と結びついて、人々をその慈愛の懷に抱き込むのである。「俺が」「汝が」といふ狹い執着の見解が無くなつて、平等の大きな心になつてゐるから、人々の苦しみは自分の苦しみであり、人々の樂しみは自分の樂しみであり、同體の大悲の心で世の中を覆ひ包むのである。釋尊の御一生がまさしくそれであつた。世の中が可愛さに、一生席の温まる暇もなく、東に西に、北に南

に遊化せられ、唯一人の佛子羅睺羅も、佛敵の提婆達多も、等しく慈愛の御眼を以つてみそなはせられたのである。それであるから「佛心者大慈悲是也」佛心とは何であるかといふに、慈悲そのものが佛心であるといはれてゐる。

佛陀

第十四章　佛　陀

人間世界の生死の苦しみを自覺して、その苦しみが自分の心の煩惱にある事を知り、その煩惱を滅し盡す道を修めて、涅槃の理想に達した人を佛陀といふのである。佛陀とは梵語であつて、これを翻譯すれば覺者、即ち覺つた人といふことである。

それで悟るとは何を悟るのであるかといふと、すべてのものは緣つて起るものであるといふ緣起の道理を悟り、迷の因果と悟りの因果を示した四諦の道理を明かにするのである。もとよりこゝに道理を悟るとか、明かにするとかいふのは、たゞ知つたとか、解つたとかいふことではない。頭の知識だけを知つたといふ意味ではない。體驗といふ語があるが、それは全心身で得ることであるが、その體驗といふ意味である。而も亦自分一人で悟つて、それで善いのではない。自分が悟るとともに、他の一切の人々に悟らしめる大慈悲心に燃え立つのである。それ故に昔から、佛とは自覺覺他覺行窮滿と、定義してゐるのである。自覺とは自ら覺ること、覺他とは他をして覺らしめること、覺行窮滿といふのは智と行とが一つになつて、智慧も修行も缺目なく圓滿してゐることである。これが佛陀といはれる方である。

自覺々他覺行窮滿

現身佛

我々が歴史の上で、この人間の社會に於いて知るところの佛陀

三身

は、二千五百餘年前、印度に出現せられた釋尊のみであるが、然し釋尊の如き偉大なる悟りをお開きなされた方は、此の世一生の人とは決して思はれない。必ずや久遠の本佛が在して、我々人類を救濟せんがために、この世に出現せられたものに相違ないのである。且つまた佛陀が佛陀たる所以は、その肉體にあるのではなくて、その悟られた法そのものにあるのであるから、佛陀は法を體とする方といはねばならない。この法とは宇宙の眞理であり、萬法の本體であるところの眞如であるから、佛陀の究極の本體は眞如の法そのものといはねばならぬ。この眞如の法を法身佛といふのである。眞如の法であるから、この場合の佛陀は、色もなく、形もない。また成佛の初めもなく、示滅の終りもない。法身佛は世界中至る所に遍滿して、在しまさぬところはないのである。

法身

佛性・如來藏

この法身の佛陀は眞如の法であるから、何人も所有しないものはない。凡夫と雖もこの眞如の法を具へてゐるのであつて、たゞそれが無明の闇に覆はれて顯はれないだけである。この何人も所有する眞如の法を、完全に顯はれるやうにすれば、佛陀と呼ばれるのであつて、我々の境涯では、いはゞ、この法身が腹の底で眠つてゐるといふべきものである。働き出させるべき狀態にあるのであつて、この狀態にある法身を、佛性とも、如來藏ともいふのである。

報身

一度目醒めた人が、佛にならうといふ菩提心を起し、衆生を救濟しようといふ大願を立てゝ、この大願の成就のために道を修め、行を積み、願と行とを圓滿して、遂に佛陀となり給うた時に、その佛陀を報身佛といふのである。報は酬報の意味であつて、因位に於ける願と行とに報い顯はれた佛陀である故に報身と呼ぶのである。

阿彌陀佛

それ故にこの報身佛は、先の法身佛を本體とし、佛性、如來藏を完全に開發なされた佛陀といふべきである。かの法藏比丘が世自在王佛のみもとで菩提心を發し、衆生救濟のために本願を立てられ、因位の五劫の思惟と兆載永劫の修行に酬いられて、遂に阿彌陀佛となり給うたが、阿彌陀佛は實にこの報身佛で在しますのである。

應身

さてこの報身佛が、衆生を救濟する必要上、衆生の機宜に應じて、姿をこの世に顯はし給ふのを應身佛といふ。應身佛とはそれ故に衆生に應じて、假に姿を現はし給うた應現の佛陀といふ意味であつて、

彌陀と釋迦との關係

釋尊は實にこの應身佛で在しますのである。先にも述べたやうに、釋尊はたゞこの世の一生の方ではなく、まことに久遠の本佛で在します。阿彌陀佛が衆生救濟のためにこの世に化現せられ、本願のいはれを宣べ弘めんがために應現せられた方である

佛教徒の悅び

といふべきである。

我々は今かくの如くに、我々の理想的人格として、この法・報・應の三身を具足し給ふ佛陀を仰ぎ、その佛陀の教へ給うた教法を有するものである。我々はこの佛陀の冥祐を蒙むりつゝ、我々の生活を迷ひから悟りへ、向きを變へねばならぬ。我々は佛陀の限りなき慈愛に温められつゝ、理想の實現に一歩づゝ進み得る、この佛教徒としての多幸を感謝せねばならぬことである。

佛教讀本　卷四（終）

410
380

昭和十六年三月二十五日印刷
昭和十六年三月三十一日發行

佛教讀本 卷四
(停) 定價金壹圓

著作者 大谷學院
右代表者 舘 義 順

印刷兼發行者 京都市下京區正面烏丸東入二十人講町二十番地 西村七兵衛

發行所 京都市下京區正面烏丸東入二十人講町二十番地 法藏舘
電話下四五八番
振替口座一七〇四番

不許複製

大谷學院藏版

終